松波むかし語り　ここに住み続けて　その41

今回のお客様

(有)佐藤富治商店のおかみさん

佐藤（さとう）　ケンさん　87歳　4丁目

“リヤカーに小さな子を２人乗せて、引き売りから始めました。若いからできたんでしょうね！

“佐藤八百屋”といえば、昭和30～40年代、ちょうど映画『三丁目の夕日』の頃、公民館前にあって松波中、いやもっと遠くからもお客がやって来てごった返していた伝説中の八百屋さんでした。今回はそのおかみさん、佐藤ケンさんにご登場いただきます。

佐藤さんと故富治さん夫妻は「魚沼産コシヒカリ」で有名な新潟県塩沢町(現、南魚沼市)の生まれ、父親が日立航空機という、戦時中、軍用機を造る会社にいた関係で、現在の松波公民館前にあったその社宅に越してきます。昭和19年の師走のことでした。「大森で所帯をもって、そこから空襲の中、大八車を一日いくらで借りて所帯道具を運んできたんですが、登戸の坂が登れなくてね、お巡りさんが押してくれたりして……」。その頃の松波はどんなでした？「まだ庭に防空壕があったり近くの畑には不発弾が埋まっている時分で、公民館の通りを兵隊さんが行軍するんですよ。そのクツ音が怖くてね」。当時、千葉商の食堂にもその日立が間借りしていたといいます。戦争がごく身近にあった時代でした。

しかし、戦争が終わると会社は解散、さて何して食べていこうかということになり、当時思うように手に入らない野菜はどうかという話になって八百屋を始めます。「サツマイモが当時統制品、野菜をもってくればたいてい統制品、取締まりが厳しいでしょ、箱の中にしまって運んだり、隠しながら売ったりしたもんですよ」。仕入れそのものが思うにまかせない時代でした。「野菜を売ってるだけでは食べて行けないから、タンス運びまでしたもんです」。リヤカーに乳飲み子を２人乗せて、引き売りもしました。「若いからできたんでしょうね」と佐藤さんは笑います。

それが統制が解け、戦後のベビーブームに乗って松波中が子どもであふれた時代、昭和30年代から40年代にかけて佐藤商店の全盛期がやってきます。「当時は６人もの人を使って商売してました。だって、『モヤシ何グラムちょうだい！』の量り売りの時代でしたから、人手もかかったんです」。置かれた木箱の中に、ポンポンと10円銅貨が投げ入れられていたのを思い出します。「市場は早いし、店は夜遅くまで開けてましたから、ほんとによく働いたと思います」。その後、大きな住宅団地となるみつわ台の公設市場にも出店しますが、いくつか不便な点もあり10年前、店を閉めました。

昭和30年ごろ、初荷のにぎわい。
なつかしいオート三輪が並ぶ。

今の松波をどう思いますか？「松波を通るバスがなくなってしまったのは不便でねえ。年寄りはみんなそう言っていますよ。人通りも少なくなってさみしくなりましたし…」。

佐藤さんは、若い頃、リヤカーを引いて商いをした経験が今も生きているのでしょうか、とてもお元気で、お子さん、お孫さんとの暮らしを楽しんでおられるようでした。そして、最後に念を押されたことがあります。「佐藤八百屋をひいきにしてくださった松波のみなさんには、今も感謝していると一言入れてください」と……。